様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１１９５

研究課題名（和文）国語科教師が学びのコミュニティにおいて行政教員研修経験を編み直す学習過程の研究

研究課題名（英文）A Study on Japanese Language Teachers' Learning Processes for Practical Knowledge: Relation between Training for Teachers and Teachers' Learning Processes through Professional Learning Communities

研究代表者
丸山　範高（MARUYAMA, Noritaka）

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０４１２３２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,700,000円、（間接経費）　510,000円

研究成果の概要（和文）：　高校国語科教師が、行政教員研修経験をどう意味づけ、同僚教師たちと研究的にどう関わり、授業改善を進めているかという教師学習プロセスを解明した。複数の初任教師と中堅教師を対象に調査した結果、どの教師も共通して、ことばの学び手として理想の学習者像・現実の学習者・行政研修等で示される教育政策的な要求、これらの共通項を探りつつ授業改善に努めていた。なお、授業改善にとって同僚教師の助言は重要であるが、あくまで自分らしい実践の指針となる助言を、教師たちは主体的に取捨選択し意味づけていた。
　研究成果は、査読あり学会誌掲載論文（2編）および大学発行の紀要（3編）＜合計5編・2014年6月現在＞として発表した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to elucidate the processes whereby Japanese language teachers gain practical knowledge of Japanese language teaching by learning based on training for teachers and professional learning communities. This study analyzed novice and middle teachers' narratives through interviews. The narrator teachers manage classes by balancing students' learning with national curriculum. They improved their Japanese language teaching methodologies based on significant counsel by teaching colleagues.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：国語科教育　教師教育　質的研究　教員研修　教師の学習　教師の語り

１．研究開始当初の背景

本研究は、国語科教師研究における先行研究が不十分な領域、つまり、「行政教員研修」「教師同士の学び合い」と関連づけながら国語科教師の学習過程を解明した。

現在の教師研究では、「反省的実践家」としての教師（ショーン 2001）が、発問など「見える実践」でなく、教師としての省察・見識など「見えない実践」に教職専門性を見出し（佐藤 1996）ながら、教師教育のための授業研究を行うことに意味がある（髙木 1997）とされている。

国語科教師研究も、この方向で研究が進められているが、特定の教師の実践的知識が完成形で提示されたり（藤原ほか 2006）、「集団的リフレクション」などで教師間協議がなされるが、当該授業の実践方法に関心があったり（澤本ほか 1996）して、教師同士が関わり合い変容していく学習過程までは十分解明されていない。

また、行政教員研修と日常の授業実践とをつなぐ国語科教師の学習研究は管見の限り見当たらない。行政研修は、「他律的で画一的」「技術的対応主義」「教師の個人特性への配慮がかなり乏しい」といった批判がなされるが（西 2002）、問題は、行政研修にではなく、行政研修を日常の授業実践との関わりで意味づける教師の学習過程モデルが提示されていない点にあると考える。

以上のような研究動向から、本研究では、反省的実践家としての国語科教師が、他の同僚教師たちと学び合う中で、行政教員研修経験を意味づけ授業改善のための新たな知見を獲得するに至る教師の学習過程（変容）モデルの開発を目指す。

このような、個々の教師の実践の文脈を背景にしたボトムアップ型の学習過程モデルは、抽象化・脱文脈化されたモデルとは異なり、類似した実践の文脈を背負う他の多くの国語科教師に対して、共感を与えるとともに、教師の学習過程についての見通しを提供できる点で意義がある。

【引用文献】

ドナルド・ショーン（2001、佐藤学・秋田喜代美訳）『専門家の知恵』ゆみる出版
佐藤学（1996）「授業という世界」稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店 p.113.
髙木展郎（1997）「教師教育のための授業研究」全国大学国語教育学会編『国語科教師教育の課題』明治図書 pp.86-95.
藤原顕ほか（2006）『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ』溪水社
澤本和子ほか（1996）『わかる・楽しい説明文授業の創造』東洋館出版社
西穣司（2002）「教師の力量形成と研修体制」日本教師教育学会編『教師として生きる』学文社 p.223.

２．研究の目的

本研究の目的は、高校国語科教師が、初任者研修や 10 年経験者研修など、過去に経験した行政教員研修をどう意味づけ、同僚教師たちとどのように研究的に関わり、授業改善を図っているかという教師の学習過程を解明することにある。

研究期間全体を通して調査・解明した内容は、以下のとおりである。

（１）国語科授業実践に関わる行政教員研修を調査し、その形態と内容の特質を明らかにする。つまり、ある教育委員会が実施する国語科授業研修にはどんな特色があるのかを明らかにする。

（２）上記（１）の研修（初任者研修・１０年経験者研修）を１～３年内に経験した国語科教師を調査協力者として選出し、行政教員研修経験が日常の授業実践にどう影響しているかについて、授業観察とインタビュー調査とを組み合わせながら解明する。そして、当該教師ならではの、国語科授業実践知を概念化する。

（３）上記（２）の研究協力者を対象とした調査（授業観察とそれに基づくインタビュー調査）を継続し、それぞれの教師たちが、行政教員研修のみならず、同僚教師たちとの研究的関わりをどう意味づけながら授業改善を図っているかという国語科教師としての学習過程を解明し、上記（２）で明らかにした授業実践知の変容の様相を記述する。

３．研究の方法

本研究で解明しようとする対象は、事例として取り上げた教師の経験の意味である。言い換えれば、授業実践経験を基盤に構築される教師の知識・思考である。そのため、教師の意識内部に保有されている、目に見えない認識・判断・意図などを概念化する必要がある。それは、個々の教師の経験を単純に断片的に寄せ集めたものではない。国語科授業実践についての、個々の教師の、意味ある経験プロセスを組織立てて概念化する必要がある。したがって、教師の語り＝ナラティヴを分析・解釈・構造化するという方法によって研究対象にアプローチできる。

ところで、語り＝ナラティヴとは、「語り手と聴き手の間における今ここでの相互行為という側面と、語り手が語るあのときあそこでの経験の物語という側面」（藤原 2007）とを含みこんだ概念である。それは、「意味づけのしかたが問われる」、「語り手と聞き手の相互行為を重視する」、「語りによって生成される変化を重視する」といった特徴を有する（やまだ 2005）。本研究で分析対象とする経験の意味づけとしての教師の語りは、語る内容がインタビュー前から教師の頭の中に予め蓄えられていてインタビュアーがそれを遺漏なく正確に引き出すという性質のも

のではない。インタビュアーが、現在の実践を起点に過去から未来に至る語り手教師のこだわりを見極め、問いかけを工夫しつつ、インタビューを展開していく中で、経験が意味づけられ語りが協同構築されるというものである。さらに、授業改善のための教師の学習は、唯一の正解を探し当てて終了するものではなく、継続的営為である。したがって、変化に対して開かれているという性質を持つ。このように、本研究で解明する、教師の経験の意味は、ナラティヴ研究の特質に合致するため、ナラティヴ・アプローチという研究方法は妥当性を有する。

なお、教師の語りを分析していく過程で、複数の教師に共通する概念が析出された場合は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M‐GTA）によって、教師間に共通する枠組みを解明した。GTA とは、「サービスの要素を有する実践的領域」（木下 1999）において、分析対象が「対面的なやりとり（社会的相互作用）のレベル」（木下 1999）のもの、そして、「当該領域において現実に問題となっている現象」(木下 1999)を取り上げ、その現象が「プロセス的性格をもっている」（木下 1999）場合に適した方法である。 本研究は、教師との「社会的相互作用」の中で学習者が教材文を読むという「実践的領域」で、教師が授業改善のための授業実践知をいかに構築するかという「問題となっている現象」を対象とする。しかも、教師の授業実践知は、固定化したものではなく、課題発見から課題解消、そして、教師としての今後の学習に対する展望に至るまで不断に高め続けられるという「プロセス的性格」を持っている。ゆえに、研究方法として、GTA は妥当である。なお、様々な流派の GTA のうち、本研究が M‐GTA を採用した理由は、「データを切片化するのではなく」、「データの中に表現されている」「コンテキストの理解を重視する」（木下 2003）からである。調査はインタビューのみならず、授業観察も行い、語り手と聞き手とでの実践の文脈の共有を図った。したがって、個々の教師の語りを切片化して文脈を壊すのではなく、文脈をふまえて解釈を試みた方が、より現実に即した分析ができる。

研究の手続きは以下のとおりである。まず、教育委員会指導主事を対象に初任者研修および 10 年経験者研修の内容に関わる聞き取り調査を実施するとともに、当該研修を直近の１～３年内に受講し終えた高校国語科教師のうち、授業改善に前向きに取り組んでいる教師たちを紹介していただいた。続いて、以上の条件に合致する高校国語科教師を対象に、国語科授業観察とインタビュー調査を実施し、その後、インタビュー・データ（教師の語り）を文字化しカテゴリー分析を行った。なお、同一教師を対象とする国語科授業観察とインタビュー調査は、複数年度継続して実施し、データの精度を高めた。

【引用文献】

藤原顕（2007）「教師の語り―ナラティヴとライフヒストリー」秋田喜代美・藤江康彦編『はじめての質的研究法　教育・学習編』東京図書 p.336.

やまだようこ（2005）「ライフストーリー研究　インタビューで語りをとらえる方法」秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー』東京大学出版会 pp.198-200.

木下康仁（1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ―質的実証研究の再生―』弘文堂 pp.178-181.

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂 p.29.p.145.p.158.

４．研究成果

本研究では、行政機関の実施する教員研修が、高校国語科教師（初任教師・中堅教師）の授業改善のための主体的学習に及ぼす影響関係を考察するとともに、行政教員研修のみならず同僚教師たちとの研究的関わりを通じて国語科教師たちが授業改善を図るに至る教師としての学習過程を解明した。

初任教師と中堅教師とでは程度差はあるが、両者とも共通して、行政教員研修を１つのきっかけとして活用し、同僚教師の助言を適宜取捨選択しつつ、自分らしい授業スタイルの確立を目指して主体的に授業改善のための教師の学習を進めていた。初任教師だからと言って、教員研修で講義された内容、あるいは、先輩同僚教師の助言などを全面的に受け入れていたのでは、学習者の学びに寄り添った授業改善はなし得ないという結論を得た。また、初任教師・中堅教師ともに、現在の実践に安住することなく、常に現実践を相対化する視点を持っていることも明らかになった。

したがって、行政教員研修は、そのもの単体で教師の学習と結ぶのではなく、教師たちの日常の授業実践および同僚教師たちとの研究的関わりと関連づけつつ、教師自身のことばで研修・実践経験を語り直していくことにより、授業改善が実現できるのである。また、授業改善に励む国語科教師たちは、ことばの学び手としての理想の学習者像、現実の学習者、学習指導要領等の教育政策的な要求、これら３者の共通項を探りながら日々の授業を構想・実践・評価しているのである。

以下、高校国語科授業実践に関わる行政教員研修についての特色、複数の初任高校国語科教師に共通する、あるいは、複数の中堅高校国語科教師に共通する、授業改善のための教師の学習過程、それぞれについて、調査結果の概要を報告する。

（１）複数の教育センターを訪問し担当指導主事を対象に、高校国語科教師を対象とする初任者研修および 10 年経験者研修のね

らいと内容（国語科授業実践に関わる研修に限定）に関して聞き取り調査を実施した。それぞれの教員研修の内容は、校内研修と校外研修とから成っているが、いずれの研修も教育委員会が求める知識を一方的に伝達するという内容ではなく、受講者の能動的な取り組みを重視する内容であった。校外研修では、受講者一人ひとりが年間を通じた課題テーマを設定し、計画・実践・評価という一連の活動を遂行し、その成果と課題を報告するという課題解決型の研修を重視する傾向が見受けられた。一方、校内研修は、指導教員の授業参観（初任者研修の場合）、および、受講者自身の授業公開とその検討といった活動が中心となっていた。なお、校外研修の中には教育委員会が求める知識（学習指導要領や学習評価の方法など）を講義するという内容の研修も組まれてはいるが、その場合、その知識と学校現場での実践との関わりを受講者一人ひとりが熟考しながら知識の習熟を図る取り組みの工夫がなされていた。

（２）複数の初任高校国語科教師に共通する、授業改善のための教師の学習過程として、教師たちは、学習者が教材文を主体的に読み深めていくために、教師と学習者による対話的授業展開をベースに、教材文を解釈する段階から教材文に対して自分の意見を持つ段階に至るまで、主体的に教材文へ関われるよう種々の工夫を行っていた。そして、こうした授業改善のための教師の学習過程には、初任者研修のみならず、初任教師たちの人生全般にわたる経験が総合的に影響していた。

このうち、教材文の読みのあり方に関わる実践知は、初任者研修よりも教師個人の私的人生経験および教室の学習者との出会いの経験が大きく影響する。初任者研修（校内・校外）は、国語科授業のみならず教職全般にわたる網羅的な内容の研修が、それぞれ限られた少ない時間で計画・実施されている。したがって、教材文の読みのあり方といった、習熟に時間を要し、かつ、普遍化された方法・技術として抽出しにくい教科内容的な実践知については、初任者研修外の経験の比重が大きくなる。

一方、授業展開に関わる実践知は、教材や分野を超えてある程度の普遍性・一般性があり、かつ、方法・技術として抽出しやすいため、初任者研修経験の影響を比較的大きく受けることになる。ただし、初任者研修で提示される外在理論が直接的に初任教師たちの実践に適用されるというのではなく、教師たち自身がそれを実践上のつまずきと対照させ省察した結果、実践知として結実する。

（３）複数の中堅高校国語科教師に共通する、授業改善のための教師の学習過程として、教師たちは、教材文のことば相互の関係把握につまずく学習者のために、教員研修（10 年経験者研修に限らず特定の教育理論の普及を図る教育委員会企画の教員研修なども含む）で学び得たことを指導過程の再構築のために取り込む。その上で、学習者が主体的に教材世界に関わる国語科授業が実践できるよう、現実践を相対化しつつ不断に授業改善を図っている。このような学習過程を見る限り、中堅国語科教師たちにとって行政教員研修経験は、研修の受講＝授業改善というような、単純かつ直接的な関係で意味づけられるものではないことがわかる。行政教員研修のうち、たとえば、特定課題普及型研修であれば、個々の教師に寄り添い時間をかけて個々の教師にふさわしい学習を支援するというよりも、特定教育理論の学校現場への普及に重点が置かれる。また、課題解決型研修の場合、研修を支援する人的物的資源が限られているため、個々の教師による課題発見から課題解消に至るまでの中長期的取り組み全体にわたっての、きめ細かな支援ができにくいことも多い。したがって、行政教員研修は、教師の学習過程の一部としてしか機能し得ておらず、中長期的な期間を要する、授業実践知構築に至る教師の学習過程全体を支援することが難しく、学習過程の多くの部分が教師個人の主体的な研鑽に委ねられていると言える。

しかしながら、一方で、教員研修を経験したからこそ、外在教育理論に出会い、その理論を手がかりとして指導過程改編が促された、あるいは、教員研修として公開研究授業を企画・実践する中で現指導過程を相対化する機会を得たという積極的意義も見出される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 丸山　範高、国語科授業実践における単元構成・単元展開に関わる国語科教師のナラティヴ―同僚教師からの助言に基づく省察を通じた実践の精緻化に向けた教師の学習過程―、和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要、査読無、№２４、2014 年、印刷中

② 丸山　範高、国語科教師が授業実践知を構築する学習過程―行政教員研修経験が中堅国語科教師の学習に及ぼす影響を中心に―、日本教科教育学会誌、査読有、第３６巻第４号、2014 年、pp.69-82.

③ 丸山　範高、初任国語科教師の授業実践知構築プロセスモデル―初任者研修内外

の諸経験についての教師の語りの分析を通して―、教育実践学研究、査読有、第１５巻第１号、2013 年、pp.15-26.

④　丸山　範高、教員研修が国語科授業実践のための専門知構築に及ぼす影響―国語科教師に関わる事例研究―、和歌山大学教育学部紀要―人文科学―　、査読無、第６３集、2013 年、pp.39-48.

⑤　丸山　範高、10 年経験者研修を媒介とする国語科教師の授業実践の深化、和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要、査読無、№２２、2012 年、pp．71-80.

〔学会発表〕（計２件）

①　丸山　範高、国語科教師の授業実践知と教員研修との関わりについての事例研究、日本教科教育学会第 38 回全国大会　2012 年 11 月 3 日 東京都

②　丸山　範高、初任者研修が国語科授業実践に及ぼす影響、全国大学国語教育学会第 122 回筑波大会　2012 年 5 月 26 日　つくば市

６．研究組織

(1)研究代表者

丸山　範高（MARUYAMA, Noritaka）
和歌山大学・教育学部・准教授
研究者番号：５０４１２３２５